

Religion Cafe での質問から

大阪市立大学都市研究プラザの後援を得て、真宗大谷派僧侶の川浪剛氏が大阪阿倍野区の洋館付き長屋で毎月開催している Religion Cafe という催しがある。宗教関係者をゲストに招き、地元の店から提供された菓子や飲物を頂きながら、ざつぱらんに宗教について語り合う会で、もう2年近く続いている。

先月、私もそこで話をする機会を与えられた。テーマは「生きる意味を心に届ける—震災後に宗教者ができること—」。宗教者ならではの震災支援のあり方について、とくに心のケアに焦点を当てながら、自分の考えるところを話題提供として述べた。その後、参加者とのやり取りがあり、数多くの貴重な質問や感想が寄せられた。

その中で、ある方から頂いた意見に、次のようなものがあった。今度の大地震の被災者は日常性をはるかに超える体験をした。それは一種の超越体験であって、宗教者ならば、この体験から何かを学ぶことができるのではないか。そして宗教学者もまた、そうした超越体験について、聞き取り調査をするべきではないか、と。

これはとても逆説的な問題提起だ。この意見を述べたのは、自らも大学で宗教学を教えているM氏であった。たしかに我々は、震災救援ということに関して、どうしても固定した視点に囚われてしまっている。そして、そのために、いつのまにか上から目線の被災者支援になる危うさを抱えているように思う。我々が忘れているのは、目線を低くして、謙虚に被災地に学ぶ姿勢である。

大地震や津波の衝撃、大切な人や財産、地域での暮らしを喪失した悲痛な体験、避難所での過酷な生活。有りうべからざるこれら非日常的事態を、現実のものとして体験してしまった人は、もはやそれを受け入れ、その中で自らの生を生きなければならぬ。

超越的な契機は、人間だれもが潜在的に有しており、その意味で超越体験はすべての人間の内に胚芽として存在する。それが突如、現実の事態となった人々は、日常性を突破する超越的な体験をしたことになる。そこに何らかの聖なるものの自覚や回心の要素が見いだされたならば、それは確実に宗教的体験であると言える。M氏は、宗教学者として、そのような可能性を示唆されたのである。

リアリティショック

過酷な現実と直面し、それ以前に抱いていた理想や想像との落差に衝撃を受けることを、心理学ではリアリティショックと呼ぶ。新入社員が会社に入ってビジネスの現実を知る。看護師が病院に入って臨床現場の現実を知る。これと同様に、ボランティアが被災地の実情に直面してリアリティショックを受けることもある。“心のケア”が必要なのは、むしろそうした人たちだったりする。

そもそも、人々はなぜボランティアとして被災地に行くのだろうか。その深層心理的な理由として一つ指摘できることは、非日常の場面で直接、人々に貢献することでエンパワーされるのが、他ならぬ自分自身だということだ。病院で重病の人のお見舞いに行き、かえってその見舞い客自身が励まされることがあると、よく似ている。それだけボランティアに、心の傷

つきやすさが存するということである。

実存思想家のキルケゴールは『不安の概念』の中で、どんなに現実が深刻であっても、単なる可能性ほどには恐ろしくない」と述べた。人間は想像の中であらゆる可能性を思い描き、それだけで疲弊してしまうが、いったん現実と直面してしまえば、それに向けて自らの全力で立ち向かうことができる。これが人間の実存的潜在力なのである。そのように考えてみると、リアリティショックはむしろ人間が真に実存するための重要な契機となりうるようにも思われる。被災者の“超越体験”も、実はそうしたリアリティショックの最たるものではないだろうか。

未曾有の大震災に遭遇した人々は、自ら人間の全本質が震撼され、通常の日常生活ではうかがい知れない^{スピリチュアル}心魂の体験をしているかもしれない。非日常的体験がそのまま宗教的体験となるわけではないが、そこに超越的な契機が含まれるがゆえに、自らの体験を宗教的体験として受け取る可能性が秘められている。

宇宙的楽観論

人間が最後に受け入れなければいけない現実、それは自分の死である。自分の死は、だれもがいずれ体験するものの、自分ではもはや追いつくことができない究極的な可能性でもある。それゆえ、死に対する想像力は最大限に発揮され、かくして死は人間にとって、最大の恐怖の対象となりうる。

宗教は、死を超越の次元から解釈し、死を超えて人間が救われることを説く。そこでの救済は超越的な意味での未来の事態であり、確信をもってこの未来を信じることが、信仰の営みとなる。とすれば、生きる意味は超越的な次元において未来から来るものではないだろうか。どんなに現実が悲惨や苦悩に満ちているとしても、信仰者は未来の救済を信じることから、今の生存を意味づけることが可能なのである。

天譴論が問題なのは、自然災害と人的行為との関わりに対する最も安易で、傍観者的な宗教的解釈であるばかりではない。天譴論が人々を意気阻喪させるのは、そもそもこれが過去志向的な因果論の文脈で語られるからである。それは、蓄積された人間の過失が神仏の怒りを招いた結果、こういう災害が起こったのだ、という後向きの因果論である。同じような因果論の文脈で語られるものであれば、たとえ神義論(弁神論)を説いたところで、人間は現実の悲惨さによって圧倒されるばかりだろう。

しかし、生存がいかに悲惨や苦悩に満ちていたとしても、それを究極的な未来から救済論的に意味づけることができるとしたらどうだろう。どんなに現実が打ち砕かれても、自らの生を未来から超越的に位置づけるならば、それは新たな意味世界の経験とならないだろうか。救済を説く宗教はいずれも、それ自体に価値がある最終の状態を予期している。J・ヒックはそうした特徴を持つ宗教的救済観を「宇宙的楽観論」と呼んだ*。

ここにもまた逆説が存在する。人間は宗教的信仰を通じ、救済の可能性を無限に羽ばたかせることで、過酷な現実を乗り越えていくことができるのである。想像力とは、人間を現実から解放する自由の“創造力”でもあるのだ。

*ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか』(間瀬啓允・稲田実訳、法蔵館、2011年)を参照。